



# 被災文化財への取り組み

—山形文化遺産防災ネットワークの活動紹介パネル展—

2011年3月11日の東日本大震災は、歴史資料を含む文化財にも多大な被害を及ぼしました。文化庁が主導して東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会が設置され、史料編纂所でも技術部職員を中心に、救援委員会の依頼を受けて被災文化財の保全処置をおこないました。救援委員会は2013年3月末をもって解散しましたが、被災文化財の復旧・修復はこれからの課題であり、各地では息の長い活動をめざした努力が続けられています。

山形文化遺産防災ネットワーク（通称：山形ネット）は、地域の文化遺産を災害から守るために2008年に発足したボランティア団体です。このたびの震災では、被災地に入り文化財の救出にあたったほか、山形県内の各大学の教職員や学生、文化財関係者、市民の方々が連携して、津波で被災した書籍や歴史資料のクリーニング作業をおこなってきました。その作業は今でも続いています。

山形ネットの発足宣言には次のようにあります。

——先祖の生きた証であり代々受け継いできた地域が誇りとする景観や固有の文化遺産が、これまでの各地の災害において懸命な取り組みの中においても失われてきたことは確かです。しかし、文化遺産は、地域にとって災害後に復興を生き抜いていくために大切な「こころ」の拠りどころ、たからというべきものであることもまた、被災の経験から明らかになってきました。まさに、これまでの教訓を学び、来るべき災害から地域の宝ともなっている文化遺産をいかにして守るか、を考えることは現代に生きる私たちに課せられた責務にほかなりません。——

山形ネットの取り組みは、特別な技術を持たなくとも、日々の生活の中で自分たちにできる作業を継続することで、文化遺産を過去から未来へとつなげるという途方もない責務を果たし得ることを、私たちに示しているように思います。

震災から2年が過ぎ、歴史資料を守るための各地での取り組みは、注目されることも少なくなってきたように思います。このたびのパネル展が、そうした取り組みの重要性を考えるための機会となれば幸いです。

